●書評：　すべてのナゾがこれで解けた!!　鴎外「舞姫」徹底解読　2022年12月刊六草いちか著大修館 2600円

川瀬健一

昨年2022年は森鴎外没後100年の節目になる年。このため多くの鴎外関連書が出されたようだが、その取りを飾ったのが本書。

著者六草氏は、鴎外の恋人エリーゼ・ヴィーゲルトの実像を始めて、ベルリンに残る公文書や教会簿、そしてエリーゼの妹の子孫を探し当てて、いままで明らかでなかったその実像に光を当てた人。本書は、2011年刊の『鴎外の恋人　エリスの真実』（講談社刊）と2013年刊の『それからのエリス　いま明らかになる鴎外「舞姫」の面影』（講談社刊）の二冊の著書で公開したその調査成果と、これまでの研究者によって明らかになった「事実」とを組み合わせて、「舞姫の謎」を徹底的に解き明かした書だ。叙述は平易で一般の読者にも取りつきやすいが、同時に根拠となる資料や出典も明記されているので、研究者にとっても「舞姫の謎」を総覧するに便利なものとなっている。

本書の構成は

第一章　「舞姫」のこころがまえ－読む前にしておくのも悪くはない

で鴎外がドイツに渡るまでの経緯と、その時代（1880年代）のドイツの実像について易しくガイド。

第二章　ドンドン知りたい「舞姫」のナカミーその時代を深く味会う

第三章　「舞姫」七不思議－思わずツッコミたくなる不思議描写を徹底解剖

第四章　「舞姫」ルーペー「舞姫」の世界をこんなふうにも楽しもう！

の諸章を通じて、鴎外が書いた小説「舞姫」が見事に1880年代のドイツとベルリンの実相に基づいて作られたものであることを、微に入り細に入って、詳しく紹介している。

この書の本題は最後の第五章と第六章だ。

第五章　迷わない「舞姫」－これまでのモヤモヤをスッキリ整理

ここでは「舞姫」物語が、森林太郎個人に起きた実際の出来事に基づいて作られたものであることと、実際の出来事を脚色して物語として公表する目的とを、鴎外をめぐる実相と小説「舞姫」の叙述に基づいて、明らかにする。

そして最後の

第六章　ほんとうの「舞姫」ものがたり－現実と小説の狭間で－

この章で「舞姫」の主人公エリスのモデルが見つかるまでの研究の経緯と六草自身の調査で何が明らかになったかをまとめ、さらに諸史料に基づいて、帰国した森林太郎とエリーゼ・ヴィーゲルトとの間に何が起こり、どうして二人が別れるに至ったか、そしてドイツに帰国後のエリーゼの消息が簡潔にまとめられ、森鴎外の生涯にとってエリーゼの占めた位置も明らかにされ、あらためて鴎外が実体験に基づいて「舞姫」という小説を書いた心根にまで光を当てている。

自身の研究も含めて今までの「舞姫」研究を簡潔に総覧した読みやすい良書であるが、一点、謎の中で明らかになっていない点をぼかして叙述されていることが残念である。

それは森林太郎とエリーゼ・ヴィーゲルトがいつどこで出会って恋に落ちたのかという、ある意味恋物語としてはもっとも大事な謎だ。

実は本書で描かれた実際の話は、1888 年秋に林太郎が帰国しその四日後にエリーゼも別便で来日して以後の事だけであり、それ以前の二人の出会いと愛をはぐくんだ日々についてはまったく触れていないのだ。そして六草氏の綿密な調査でも、林太郎とエリーゼが出会ったころのエリーゼの住所と職業はまだあきらかになっていない。

林太郎のドイツでの住まいは、1884 年 10 月以後はライプチッヒ、1885 年 5 月以後はドレスデン、1886 年 3 月以後はミュンヘン、1887 年 4 月以後帰国する 1888 年 7 月まではベルリンなのだが、ちょうどこの期間のエリーゼの消息が明らかでないのだ。

エリーゼは 1866 年に当時はドイツであったポーランドのシュチェチンのおそらくは母の実家で生まれたが、生後すぐに父の仕事場があったベルリンに戻り、1883 年まではベルリンの下町に住んでいたことが確認できる。そして林太郎と別れてドイツに戻って以後もベルリンに戻り、以後は帽子制作職人として生計をたて、1905 年にはユダヤ教徒の貿易商と結婚し、1953 年に老人ホームで死去したことは明らかになっている。

だがドイツに林太郎が滞在していた期間の記録が見つからないのだ。

1880 年頃にエリーゼの父が死亡していることは母の住所録から推定でき、さらに 1883 年に母が再婚し、父親違いの弟が生まれたことも確認できる。しかしこれ以上はわかっていない。

六草氏は、どの著書でも二人の出会いがどこだったかは明言せず、資料がないとの表現にとどめているが、本書

の記述ではしばしば小説の主人公のエリスと実際の恋人エリーゼを重ね合わせて記述しているので、心の底では二人の出会いはベルリン、それもエリーゼ一家が暮らしてきたベルリンの下町、古ベルリン地区だと推定しているのではなかろうか。そしてその根拠は、小説「舞姫」での二人の出会いが古ベルリンであることと、エリーゼの母親の再婚後の住所が古ベルリンの林太郎の二度目の下宿のすぐそばであることだろう。だがこの二つは証拠にならない。

だからこそ「すべてのナゾを明らかにする」と銘打った本書で、二人の出会いについてはまったく口を閉ざしたのだ。

だが小説がすべて事実に基づいていると仮定することはできないし、17 歳になった娘が再婚後の母とその夫と同居しているとも思えない。

むしろ彼女は母の再婚を機に、独立したのではないだろうか。

小説「舞姫」ではエリーは 15 歳のときに「舞師の募集に応募して」この技、つまりバレーを習ってプロのダンサーになったとしている。

この小説上の仮託が実際に基づいているとしたらエリーゼは父の死去前後に「舞師」（これは舞の師匠ではなくプロのダンサーという意味）になり、母の再婚を契機に独立したと読むべきだろう。

だが六草氏はなぜか小説のエリスが舞師、すなわちプロのダンサーだったと書かれていることと実際のエリーゼの職業を結び付けて考えず、「鴎外と豊太郎が、名前と研究分野も少しずつ事実からずらす工夫がなされていることから、エリーゼは踊り子ではなかったと考えるのが妥当ではないか」（『それからのエリス』 p 23）と、エリーゼ＝舞師説を一蹴している。

そこで筆者は逆に、小説のエリスの職業と実際のエリーゼの職業も、共に「舞師」だったと仮定して、エリーゼが母の再婚後に独立したその独立先はどこだったのかを考えてみたい。

こう推理すると舞姫について鋭い論考を発表してきた故林尚孝氏の論考が注目される。

氏は林太郎のミュンヘン滞在最後の日である 1887 年 4 月 15 日の日記に突然現れる「舞師」こそエリーゼではなかったかとしている。根拠は「舞師」の筆跡帳に記したという漢詩の内容が「東洋からきた青年が金髪の女性と出会い、二人で舞踏会にて華麗に踊れるまでになった」ということから、相手は女性しかも「舞師」だからプロのダ

ンサーであり、小説「舞姫」のエリスと同じだからだ。

この林氏の説に焦点を当ててみると、エリーゼがダンサーとして自立したのはベルリンではなくミュンヘンだということになる。

では鴎外の『独逸日記』に二人の出会いは記録されていないのかと精査して見ると、それらしき記述があったのだ。

それは鴎外がミュンヘン駅に降り立った 1886 年 3 月 8 日の夜。謝肉祭最後の夜の仮面舞踏会で一人の女性に踊ろうと声をかけられたが「踊れない」と断ると、一緒に酒でも飲もうと誘そった女性との出会い。林太郎は舞踏会後に彼女の家まで送って別れた。その別れに際して彼女は「ここに伯母と暮らしている」、そして「昼間は冠肉厨 Kronfleischkueche (Frauenstrasse 12)で給仕をして」おり、「わたしの名は Babette」と名乗り、一度来てみてと言ったが、真偽がわからないので尋ねなかったという記述だ。

考えてみればおかしい。二度と会わなかった女性の昼間の働き先の名と住所まで日記に記すとは。そして Babette という名。これはドイツ語でバレーを指すバレット　Ballet をスペルをちょっと変えただけのもの。

さらにドイツに渡ってから足しげく舞踏会に通っていた林太郎が、ミュンヘンに来る前の日のドレスデンでの舞踏会の項に初めて「踊れない」と告白し、翌日のミュンヘンでの女性との出会いでも「踊れない」と告白する。この二度にわたる告白は何を意味しているのだろうか。

これはその約 1 年後にミュンヘンを離れる前の日に「舞師」の筆跡帳に書いたという漢詩には華麗に舞踏会で踊ったと書かれていることとセットで考えるべきだ。つまり林太郎は、この 1886 年 3 月 8 日の夜ミュンヘンの仮面舞踏会で出会った女性こそ彼の舞の師匠であり、ドイツでの恋人であると示唆しているに違いない。

この彼女の昼間の勤め先冠肉厨 Kronfleischkueche (Frauenstrasse 12)の上層階に彼女は伯母と暮らしていたのではないのか。とすればアパートの借主は伯母。当時のミュンヘンの住所帳や公文書のこの住所に彼女の伯母、母方の伯母で未婚であれば母の旧姓のキークヘーフェル、亡き父の姉妹でもし未婚の姉妹ならば、ヴィーゲルト姓の女性が確認できれば、この推測が真実となる。

二人の出会いはベルリンだとの長い間の思い込みから離れて、調査をミュンヘンに広げて、先の住所や、『独逸日記』での林太郎のミュンヘン時代の立ち寄り先を精査して見れば、二人の痕跡が出てくるものと思われる。たとえ

ば林太郎が 1886 年 9 月 3 日から 18 日まで小旅行を行ったミュンヘン郊外の景勝地スタインベルヒ湖（鴎外の第二の小説『うたかたの記』で、画家と、謝肉祭の最後の日にドレスデンで出会い画家がミュンヘン駅頭に立ったその夜に再会し恋仲となった女性マリイと舟遊びをして、マリイが事故で水死したその湖）とその近郊のレオニイ。日記のこの箇所に明記してある二つの宿の宿帳の、当時の宿泊人を確認してみれば、ここに森林太郎とエリーゼ・ヴィーゲルトの名が見つかるかもしれないのだ。

日本英学史学会会報№156 号　2023 年 10 月号　掲載